

1

様々な都市伝説

都市伝説とひとくちに言っても、怪談に近いものから陰謀論まで多岐に渡る。今回は4つの分野に分けて、代表的なものを紹介する。

政治 に関するもの

政治分野の都市伝説は情報隠蔽など、大衆のパニック心理を利用したものが多い。たとえば「巨大地震は予知されているが、国民の混乱を避けるため一部の有力者を除いて公表されない」「沖縄に地下鉄を作らない本当の理由は、旧日本陸海軍が終戦時に隠した超大型最終兵器（詳細不明）が埋まっているため」などがある。

場所 に関するもの

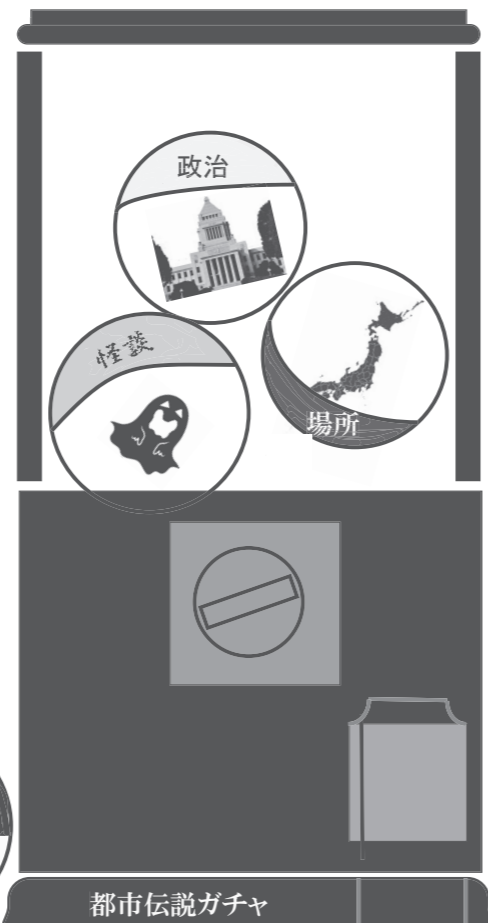
日本全国では、さまざまな場所に関する都市伝説が囁かれている。東京ディズニーランドでは、ある時期になると入場者数と退場者数が一致しなくなるとか……。また最凶の都市伝説ともいわれる福岡県の犬鳴村も有名だ。車のナビが狂い、入った者は出ることができないという。遊び半分では決して近づいてはいけない！ 決して……。

怪談 に関するもの

怪談風の都市伝説も多い。たとえば、学校にまつわる口裂け女やトイレの花子さんの話は定番だろう。またトンネルや病院での不可解な現象も都市伝説として語り継がれている。他にも「捨ててしまった人形であるメリーさんから電話がかかってきて……」といった話も知られている。

アニメ に関するもの

アニメにまつわる都市伝説も多く存在する。アニメの本編では語られていないが、裏に隠された設定や制作秘話が都市伝説となる傾向にあるようだ。そのなかには信ぴょう性に欠けるものもある。国民的アニメである『ドラえもん』や『サザエさん』、ジブリ映画にもたくさんの都市伝説が存在する。



「早稲田大学の犬隈重信像は深夜に構内を闊歩する」

もちろん、信じるか信じないかはあなた次第。都市伝説には我々を惹きつける魅力がある。現代の都市伝説には「うわさ」という人類の最も原始的なメディアと「インターネット」という最新のメディアの融合が見られる。また、都市伝説は思わぬ風評被害やデマにつながる危険性も秘める。誰もがよく知るあの都市伝説からメディアリテラシーまで、さまざまな角度から考えていこう！

〈都市伝説の定義〉

都市伝説は「うわさ」に似ているが「うわさ」はニュースに近く、一過性のものである。それに対し、都市伝説には確かめることはできないが、あってもおかしくないような信ぴょう性がある。うまいオチがついていて、一つのおもしろいストーリーコンテンツになっているのだ。今回は都市伝説をこう定義づけする。

3

昭和・平成 都市伝説の比較

考察① ストーリー構成の類似

昭和と平成の都市伝説を比較するなかで、両者に共通するストーリー性が伺える。社会学的に考えると「トイレの花子さん」「口裂け女」「きさらぎ駅」などの都市伝説は「境界領域」で生まれたものだ。境界領域というのは、古来人々がこの世とあの世をつなぐ場所として考えてきた場所である。たとえば、トイレは汲み取り式トイレ時代の名残で、穴の向こうには妖怪や神など彼岸のものが潜んでいるとされた。また、口裂け女は十字路に現れる。「きさらぎ駅」の都市伝説では「伊佐貫」という不思議なトンネルが登場した。これらはどれも日常と非日常をつなぐモチーフになっている。これは物語の構造としては普遍的な手法だが、今も多くの人々を惹きつける魅力があるのだろう。

考察② スピードと媒体の変化

昭和と平成では、都市伝説の広まり方や、そのスピードが大きく変化した。第一に、インターネットの普及がある。これに伴い、匿名で誰もが手軽に情報を発受信することが可能になった。第二に、トレンドリーダーの発言力が強くなった。昭和時代は、子どもたちのうわさを中心に全国的にゆるやかに広まった。しかし「口コミ」が以前より大きな影響力を持つようになると、インフルエンサーなどの限られた人の発言が急激かつ容易に信じられるようになったのである。以上から、都市伝説は1つエンターテインメントとして楽しめるようになった。

2

都市伝説の変遷

新元号に関連した「〇〇振り返り」風潮にあやかろう。西は昭和、東は平成。都市伝説東西対決。はじまりはじまり！

昭和

トイレの花子さん

2020年3月



▼「花子さん、遊びましょ」と声を掛けると赤いスカート履いたおかしな姿の少女が返事をする。トイレの花子さんの歴史は古く、戦後すぐには存在していた記述がある。花子さんの特徴や弱点、幽霊になった経緯などは時代や地域によって異なる。経緯については、いずれもトイレの中で不幸な死を遂げたという点で一致している。初めは、ただ恐れられる存在だった花子さんが、一九九〇年代以降になると子どもたちの味方という設定も増えた。

口裂け女

都市伝説が広まりました一九七九年にはバトカー出動騒ぎや集団下校なども起きた。口裂け女は大きなマスクを外し、整形手術の失敗で耳元まで裂けた口を見せる。口裂け女に出くわした際は「ポマード(×三回)」と呪文を唱えれば救われる。全国の小中学生を震撼させた。

西 東

平成

きさらぎ駅

▼ハンドルネーム「はすみ」によつて二〇〇四年一月八日深夜から九日早朝にかけてインターネット掲示板書きこまれた魔界駅。新浜松駅から静岡の某私鉄に乗っていると「きさらぎ駅」という無人駅に辿り着く。そこでは太鼓と鈴の音が聞こえる。彼女は周囲の散策中に会った人の車に乗せてもらう。しかしその後、唐突に書きこみは途切れる……。以降、他の魔界駅にまつわる書きこみも増えた。時間軸が一致しない、GPSがエラーを起す、写真機能が狂う、など。二〇一一年六月三〇日に再び「はすみ」を名乗る女性できさらぎ駅からの脱出を報告したが同一性は不明。

鯨島事件

鯨島事件とは絶対に語ってはならない都市伝説。この事件の内容は全くの不明で、口にしてはならないということだけは確かである。基本的にこの事件は架空のものとされており、インターネット発祥の都市伝説として映画化され、大きな社会的影響をもたらした。

都市伝説はどのように生まれ、どのように広まるのか。今回は中央大学文学部社会情報学専攻の教授でコミュニケーション論、メディア論を研究されている松田美佐先生にお話を伺った。



◆初めに、都市伝説に関心を持ったきっかけを教えてください。

松田先生(以下松)：都市伝説とかうわさ的なもので、昔からよくあって。私も皆さんくらいの頃には、友達とたくさんおしゃべりをしていました。友達の家に泊まりに行ったときとか、中学生・高校生の頃だったら修学旅行とか。夜になんかちよっとお話をしようとか。そういう時当然、彼氏彼女の話とか、誰が好きとか、そういう話もするんだけど、ゾッとするような話もある。たとえば定番の都市伝説で、死体洗いのバイトっていうのがあるんですね。もっともっと先輩とかが語るわけですよ(笑)。聞いたとき「えー！」ってなって。「先輩そういうバイトしたんだ」とか「先輩が嘘言うわけないし」って最初は思ってたけど、「おかしいよな」とか思ってるうちに「あ、これ都市伝説なんだ!」とか。今のようにネットがあるわけじゃないから、都市伝説かどうかかわからない。うわさって大体悪口とか陰口とかで、うわさ好きっていうとあまり良いイメージが無いですよ。でも、みんなうわさ話ってるじゃないですか。良くないよねってみんな思いつつ、でもやってる、みたいな。それってすごくおもしろいなあと、興味を持ったっていうのがありますね。

◆次に、広まりやすい都市伝説の特徴やうわさの広がり方について教えてください。

松：一番有名な知見として、うわさの公式があります。第二次世界大戦中、アメリカでのうわさの広まり方の研究を心理学者たちがやっていたんですね。社会学でも必ず紹介される研究なのですが、

$$R = i \times a$$

っていう有名な公式で、Rはうわさの強さや流布量。iっていうのはimportanceで重要性。aはambiguityで曖昧さ。うわさは、重要性和曖昧さの掛け算、積だ。これは掛け算なのが重要で、どちらかがゼロだと、うわさにならない。つまり、重要ではないことについては、うわさにはならない。でも曖昧ではないこともうわさにならない。この両方が掛け算で高まれば高まるほどうわさは強く、広範囲に広まる。たとえば、災害の後によくうわさが流れたりするんですが、みんなが命に関わるような状況だったりしますよね。だから重要。かつ、この後どうなるかわからないっていう点でも曖昧さが高い。だから災害のあとうわさがすごく流れるんだっていうような角度から説明ができます。都市伝説にもそういう部分もあるけれども、都市伝説はうわさと区別するのなら、もっともらしくて、ネタとしておもしろいことが大事になると思います。

◆都市伝説はどのようなジャンルが人気なのでしょう?

松：都市伝説が流行った理由に、テレビ業界とか出版業界が飛びついたところがあるんです。おもしろいから。そのなかの一つは霊とかお化けとかの系統の話。これって、もうみんな好きですよ。信じてなくても否定はできない。夜中に話したりするのは絶対ゾゾっとしていいからね。都市伝説のもう1つの人気のジャンルって、犯罪がらみの話。都会に住んでたら、犯罪に巻き込まれる可能性が高そうなんだけど実際にはそんなに遭うことはない。でも、こんな犯罪があったって話の一つのジャンルになった。最近では、霊魂系とか心霊系の話って、信じる人は信じるけど、信じてない人はもう信じなくなっちゃう。一方で、犯罪系の話は流行り続ける。たとえば、一人暮らしの女性がいて、家に帰ると部屋に違和感がある。それでしばらく経ってふと鏡をみたら、ベッドの下が見えて。そこに人がいた……みたいな話。ありえないけど、絶対ないとも言えない。それはお化けと違って、あり得る話ではあるわけです。そういう犯罪がらみの都市伝説みたいなものって、アメリカで流行ってる話でも、日本に置き換え可能なんですよ。全部、都市だから。どこでも起こりうるような話が行く。設定が少しずつズレながらも、都会だからこそこりこりするような話とかオチがあるような話って、どこでも人気があるんですよ。

◆私たちでも、都市伝説を作ろうと思えばできますか?

松：ネタをどう作るかでしょ(笑)。

◆若い世代のメディアリテラシーをどうお考えですか?

松：一番言いたいのは、自分ももっともらしいと思うものに反動的にリツイートしたり、シェアしたりするな、と。自分のタイムラインとかで、「これってありそう」とか思ったものを確かめせず、シェアするというのが誤った情報の拡散につながる。「私はリツイートしただけ、シェアしただけで、投稿を支持したわけではない」というのは今の社会では言い訳にはならない。あとり運転の同乗者として、ある女性が「ガラケー女」と呼ばれ、非難が殺到した件を覚えていますか。実際には彼女は無関係であって、その後、誤った情報を拡散した人たちに對して法的措置を取っています。彼女の「痛み」やその後の対応を知ると、これまで何の気なしに「みんながリツイートしてるから自分もしちゃえ」って思っていたのが通じない、となるのではないですか。自分が何気なくシェアする前に「ちよっと待てよ」と思うのが、一番大切かなと思います。

【松田美佐先生 プロフィール】

- ・ 東京大学大学院人文社会系研究 社会情報学専門分野博士過程修了
- ・ 中央大学 文学部 社会情報学専攻 教授
- ・ 専門は社会情報学、コミュニケーション論、メディア論
- ・ 主著に『うわさとは何かーネットで変容する「最も古いメディア」』(2014/中公新書)など
- ・ 好きな都市伝説は「ピアスの白い糸」※

※「ピアスの穴を開けたら耳から白い糸が出てきて、それを引っ張ると失明してしまった。実は耳から伸びていた糸は視神経であった。」という話。

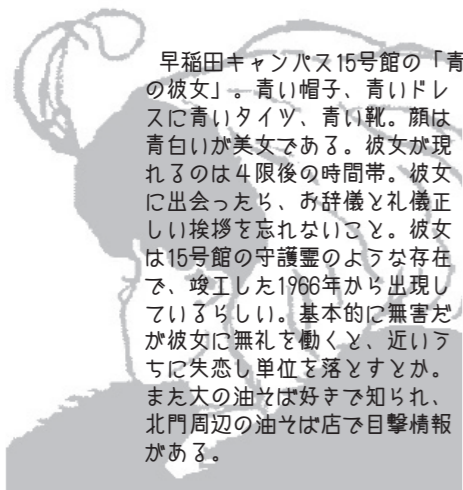


$$R = i \times a$$



Bluelady_1966

...



早稲田キャンパス15号館の「青の彼女」。青い帽子、青いドレスに青いタイツ、青い靴。顔は青白いが美女である。彼女が現れるのは4限後の時間帯。彼女に出会ったり、お辞儀と礼儀正しい挨拶を忘れないこと。彼女は15号館の守護霊のような存在で、竣工した1966年から出現しているらしい。基本的に無害だが彼女に無礼を働くと、近いうちに失恋し単位を落とすとか。また大の油そば好きで知られ、北門周辺の油そば店で目撃情報がある。



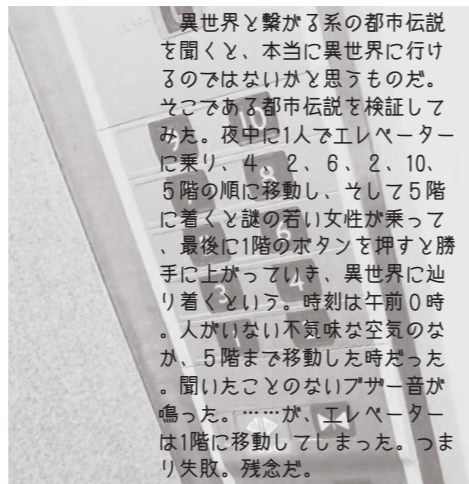
Bluelady_1966

#新しい都市伝説を発掘した。
#都市伝説、やってみた。



hanako420

...



異世界と繋がる系の都市伝説を聞くと、本当に異世界に行けるのではないかと思うものだ。そこである都市伝説を検証してみた。夜中に1人でエレベーターに乗り、4、2、6、2、10、5階の順に移動し、そして5階に着くと謎の若い女性が乗って、最後に1階のボタンを押すと勝手に上がっていき、異世界に辿り着くという。時刻は午前0時。人がいない不気味な空気が、5階まで移動した時だった。聞いたことのないアザー音が鳴った。……が、エレベーターは1階に移動してしまった。つまり失敗。残念だ。



hanako420

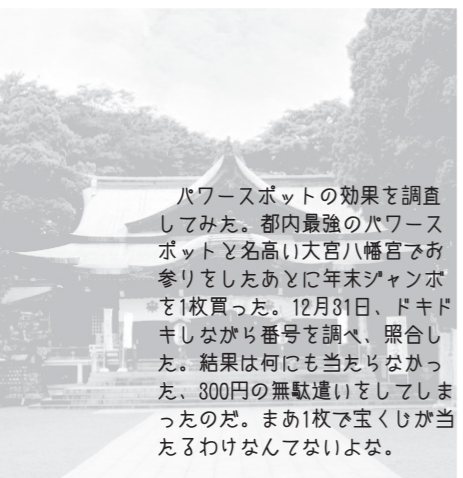
#エレベーターで異世界に行く。
#都市伝説、やってみた。

#都市伝説、やってみた。



money_money

...



パワースポットの効果を調査してみた。都内最強のパワースポットと名高い大宮八幡宮でお参りをしたあとに年末ジャンボを1枚買った。12月31日、ドキドキしながら番号を調べ、照合した。結果は何にも当たらなかった。800円の無駄遣いをしてしまったのだ。まあ1枚で宝くじが当たったわけなんてないよな。



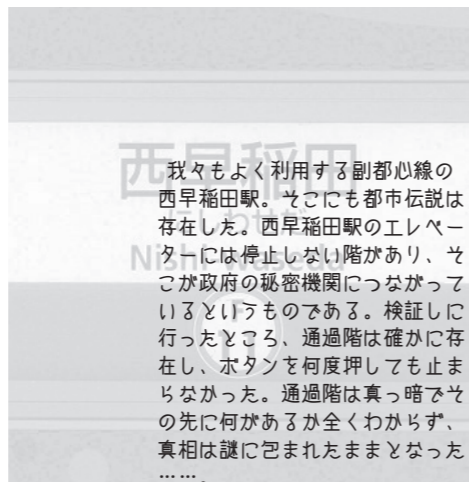
money_money

#都内最強、パワースポットはいかほどか。
#都市伝説、やってみた。



korekara4649

...



我々もよく利用する副都心線の西早稲田駅。そこにも都市伝説は存在した。西早稲田駅のエレベーターには停止しない階があり、そこが政府の秘密機関につながっているというものである。検証しに行ったところ、通過階は確かに存在し、ボタンを何度押しても止まらなかった。通過階は真っ暗でその先に何があるか全くわからず、真相は謎に包まれたままとなった……。



korekara4649

#西早稲田駅の秘密通路を見に行った。
#都市伝説、やってみた。



誘拐

「ハーメルンの笛吹き男」

をご存知だろうか。1284年にドイツの街ハーメルンで起きた事件に関する伝承だ。「ネズミの大量発生に頭を悩ませていた村人たち。どこからともなく現れたハーメルンの笛吹き男は笛を吹いてネズミを追い払ったが村人が報酬を渡さなかったため、村中の子どもたちを連れて行ってしまった」という話である。笛吹き男はどこか妖しげで呪術師のような印象を与える。実はこのような伝承は世界各地に存在する。子どもはどの共同体にとっても宝であり、守るべき存在だ。その保護対象の子どもが連れ去られるという脅威に対し、人々は団結する必要がある。そしてハーメルンの笛吹き男のように、子どもの誘拐犯はしばしば異邦人であり、周縁部からやってくる忌むべき存在として語られる。代表的なのはロマ（ジプシー）の人々。定住せずヨーロッパ各国を流浪する存在であるロマの人々は、子どもの誘拐事件の犯人とされることも多かった。子どもを守ろうとする団結は排外主義的な性質を帯びていくのである。



排外主義



デマ 事実

日本でも、子どもの誘拐事件は多々ある。ショッピングモールで誘拐された女の子が、10年以上の長期にわたり行方不明になっているという神隠しのような話も耳にする。一方、先ほどの松田美佐先生とのインタビューのなかで、虚偽の誘拐事件を報じ、保護者に注意喚起を行う例があることを伺った。事実でない都市伝説的事例をあたかも事実であるように報じることは、デマを流すことに等しい。都市伝説は想像力を刺激し、エンターテインメント的な奥深さがあるが、デマや虚言と紙一重なのだ。それが差別の温床になることもある。情報の洪水ともいえる現代社会。メディアリテラシーを得て、つい信じたくなるような情報も検証を行う必要がある。娯楽としての都市伝説と事実は隔てられなければならないのだ。